ザンビア農村における季節消費の平準化

木附晃実，櫻井武司
一橋大学

要旨

本研究の目的は、所得の変動に対する消費構成と獲得源の変化の様相を明らかにすることである。

調査地域はザンビア南部州のシナゾンゲ地域の低部平原に位置するサイト A、中部傾斜地に位置するサイト B、高部平原に位置するサイト C の 3 地域である。各地域より 16 家計ずつ選ばれた合計 48 家計が家計調査の対象であり、2007 年 11 月より毎週実施されている。本研究では 2007 年 11 月から 2009 年 10 月までの家計調査のデータを集計し、月別の成人換算一人当たりの一週間の消費額の平均値を地域毎に算出した上で記述統計分析を行った。

分析では消費財を主食、野菜・果物、畜産物、非食料財の 4 つのカテゴリーに分類し、個別の消費変動に着目した。消費構成の概要は、分析期間における成人換算一人当たりの消費額のうち、食料消費が 83.7%-88.5%、非食料消費は全体の 11.5%-16.3%であった。また、全体の消費額のうち 50.5%-52.6%が主食、12.8%-20.1%が野菜・果物、8.2%-9.6%が畜産物であった。

非食料消費と総消費に関して、各地域、各月毎に平均的な消費水準からの乖離度合を比較した。その結果、非食料消費と総消費の平均値からの乖離度合には正の相関が見られ、さらに非食料消費の月毎の乖離度合は総消費の乖離度合よりはるかに大きいものであった。この結果は、非食料消費が食料消費の変動を抑えるための緩衝剤となっていることを示唆する。

主食に関しては、サイト B、C では自給による消費が主だが、サイト A では現金による購入が主であった。このことは、サイト A において現金収入が主食獲得手段として重要であることを意味する。また、主食の消費は概ね平準化されており、そのためには現金の役割が大きいことが明らかになった。

野菜・果物の消費変動に関しても、収穫期に消費量が大幅に伸びる時期を除いて概ね平準化がなされていた。消費平準化のためには現金による購入とともに野生植物の採集が大きな役割を果たしている。

畜産物に関しては、他の食糧とは異なりあまり消費が平準化されていない。畜産物消費と総消費に関して、各地域、各月毎に平均的な消費水準からの乖離度合いを比較した結果、畜産物消費と総消費の平均値からの乖離度合いには正の相関が見られ、さらに畜産物消費の月毎の乖離度合いは総消費の乖離度合よりはるかに大きいものであった。この結果は、畜産物消費は非食料消費同様、食料消費の変動を抑えるための緩衝剤となっていることを示唆する。